

「 西日本豪雨から学んだこと 」

京都府 大山崎町立大山崎中学校 3年 井上 淳介

消防士の父から、平成30年、広島県で発生した西日本豪雨で災害派遣されたときの体験談を聞き、実際の恐ろしさや人間の絆の大切さ、また防災について改めて考えました。

平成30年7月、私の父は西日本豪雨に緊急消防援助隊として災害派遣されました。当時、広島県では台風7号の影響を受け、広島市安佐北区、安芸区、安芸郡四町、江田島市では7月6日から7日の24時間で300ミリ以上の雨量を観測しました。

豪雨の影響で災害派遣隊もすぐには近づくことができなかつたため、父は7月12日から派遣されました。普通は広島県まで3時間ほどで到着しますが、土砂などの影響で9時間ほどかかり、昼頃に出たにも関わらず、到着したときはもう夜になっていたそうです。到着した場所は土砂まみれになっており、道路か川かもわからず、家は崩れたり流されたりしている場所もあり、同じ日本ではない気がし、行方不明の方は大丈夫なのかと一気に緊張が走ったそうです。

私が父の話を聞いて特に印象に残ったことは、行方不明者の捜索や隊員の支援活動を行っている中でも、地域の人々も一緒に協力していたという話でした。父が派遣された場所には数名の行方不明者がおり、友人や家族、地域の方がスコップを持ち夏場の暑い中でも一生懸命土砂をかき、早く見つかってほしいという思いでお互いに協力し合いながら捜索を手伝っていたということです。また、地域の方どうしで食べ物や飲み物も分け合ったりする姿も見られ、助け合いの精神が、どれほど大切であるかを実感しました。

もちろん、活動には多くの困難もあったそうです。真夏の上に足元が見えないほどの土砂の中での活動は、言葉では言い表せないほどの危険が伴います。熱中症の危険があり土砂の撤去は十五分で交代すると決め、土砂の下には何があるか分からないので細心の注意を払いながらの活動であったことです。その一刻一刻が命取りになることもあります。それを思うと、消防士という職業の厳しさも改めて大変だと感じました。

一方で、そんな状況の中で地域の人々が一つになり、助け合った経験は決して無駄ではないと思います。父は、その時の温かい思いやりの態度が、後の復興活動にも大きな影響を与えたと言っていました。地域がつぶれそうになりながらも、みんなで力を合わせて立ち上がっていく姿を見ることで、本当の意味での強さを学ぶことができたと話していました。

私は父の話を聞き、西日本豪雨の経験が教えてくれたのは、第三者ではいられないということです。自然災害はいつおそってくるか分かりません。平穏な日常が一瞬で奪われる恐怖、持っているものすべてを失う恐怖を感じ、私たちが普段生活しているこの大山崎でも、もしものことが起こるかもしれません。そこで重要になってくるのが「防災」という意識です。

防災は、決して特別なことではないと思います。地域の特性を考えて、正しい知識を身につけることで、私たち一人一人が生活の中でできる行動もあると思います。たとえば、ハザードマップを確認し、自宅の避難経路を考えたり非常食や水を備蓄したり、家族で話し合うといった簡単なことから始められます。そういう簡単なことからでもいざというときは沢山の人が避難できたり、被害を最小限にできたりと結果的に大きなものになっていくのだと思います。

また、自然災害に対する意識を高めることも重要だと感じました。私たち一人一人が意識して準備をし、いつ起こるかわからない災害に備えておくことが、自分たちの将来や大切な人を守ることにつながるのだと、心から感じました。

さらに、地域の絆や助け合いの大切さを普段から意識することも重要です。学校の友達や地域の人々とつながりを持ち、互いに助け合える環境を作ることで、いざという時に頼りになる存在になると感じます。私も、友達や家族ともっとコミュニケーションを取り合い、支え合う関係を築いていきたいと思います。また、自分もいざとなった時には進んで助け合うことができる人間になりたいと感じました。

令和7年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」 作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

最後に、父が消防士として活動する姿に、私も何かを学び、行動に移すことができたらと強く思いました。大切な人を守るため、地域と協力し合うことを忘れず、将来の自分にどんなことができるのかを考えるようにしていきたいです。西日本豪雨から学んだことを胸に、これからも日々成長し続けていきたいと思います。